

「企画会議 i n 九州」

——福岡県福岡市。

「……………」

とあるファミレスの片隅で、ゴシックロリータの格好をしたローティーンと落ち着いた雰囲気漂う黒髪眼鏡美女が、それぞれ腕組みをしながら沈黙していた。そして——

「あっ、すみませーん！

コーヒーのおかわりくださあーい！」

「何度目だよ？ そんなに飲むのなら、ドリンクバーのある店にすれば良かったのに……」

「だって、取りに行くの面倒くさいしいー。

いもちゃん取りに行ってくれないしいー？」

「やなこった！

誰がヨシコのパシリなんてするもんか！」

「でしょー？」

「ドヤ顔すんなや！」

「んもう、いもちゃんは一。

そんな格好して、汚い言葉を使っちゃダメ」

「好きでこんな格好してんじゃねえーよ！

ったく……もう、いい加減にちゃんと会議しようぜ。食うもん食ったわけだしさあー？」

「そうね。経費使って食事して、何もしてないとかサイアクだししいー」



いもちゃんと呼ばれた口の悪いゴスロリ美少女の名は小野妹子 [おのの・いもこ]。そして、ヨシコと呼ばれた黒髪美女の名は、ヨシコ・クリスティーン [ー・ー] こと、紫式部 [むらさきしきぶ] である。

2人は、フリーのプロデューサー兼ディレクター&放送作家として、福岡の放送局であるテレビ番組を立ち上げようとしていた。



「——ということで、枠はゲットできたわけだけど……どうするう？」

「どうするうー、って創るんだよ、番組を。

『祭主向上委員会』って名前の番組を」

「いやー、あちこちで断られてたから、枠が取れた時点でも

のすごい達成感がー」

「いやいや、俺たちの戦いはこれからだよ！

まだ何も始まっちゃないよ！」

「だって、どんだけテレビ局回ったと思ってんの？ 関東から関西まで全滅だったんだしさー」

「たしかに、アレは辛い日々だった……」

「ウチ的には、なんだかんだで全国うまい物巡りができて良かったけど？」

「そりゃ、交渉するのはボクだったしな！」

「その分、企画書とか書いてあげてたから、イーブンじゃない？ ウィンウィンの関係じゃない？」

「この、ウィンウィン言いたいだけが！

とりあえず、パイロット版だ。パイロット版」

「そうねえ……。

今回はわかりやすーくいつきましようか？」

「とりあえず《^{ボード}祭主》の本分ってやつを見て貰わないといけないからなあ。

……やっぱ、ここは《^{ノーライフ}雑霊》退治かあー？」

「いろいろやりたいことはあるけどお、基本は押さえとかないとねえー」

「で、パイロット版の《^{チェインド}祀徒》はどうする？」

「地元のタレントの中で、《^{チェインド}祀徒》の才能があるのをピックアップして使うしかないかなあー」

「やっぱ、そうなるかー。できればボクたちのどっちかと契約してる《^{チェインド}祀徒》がいいんだけどなあ」

「それはしかたないよおー。

ウチら、こっち来て間もないしいー」

「しゃーないな。その線でやってみよう。

場所は前々から目星を付けてた廃病院で」

「例の院長が妻の愛人に射殺された、あの……ね」

「そうそう。そのあと、院長は困ってた愛人と駆け落ちして行方知れずってことにされてた……」

「まったく、W不倫の末の殺害とか……この時代も愚かしくてエキサイティングな連中ばかりで、ある意味感心するわねえ……」

「その辺はお互いにきっちり話し合えば、殺さなくてもよかった気がするけどね。そのおかげで、院長の怨念がたっぷり籠もった病院は、閉鎖されたあと《^{ノーライフ}雑霊》の温床になっちゃったというね」

「まあ、そういう場所が多数あるおかげでウチらのお仕事もやりやすくなるわけだから、これはこれでありがたいって言えなくもないわねえー」

「んじゃ、その方向でロケハン組んでやってみるとしようかー」

「地元タレントさんは、なるべくご陽気な人がいいわね。目的はあくまで《祭主》のイメージアップだから、辛くさいタイプは番組のカラーに合わないし」

「《祀徒》じゃなくていいのなら、いくらでもいるんだろうけどなあー」



——1週間後。

妹子とヨシコは、行きつけになりつつあるファミレスのテーブルにつ伏していた。

「まさか、失敗するとは……」

「しょうがないじゃない……」

あそこの《雑霊》を相手にするのに、《祀徒》の実力が足りてなかったんだから」

「よもや、タレントのSAN値が下がり切るとは」

「正気を失うぐらいの表現に留めときましょーよ」

「でもなあ、たかだか廃病院に住み着いてる程度の《雑霊》にも敵わないじゃ話にならないよ……」

「どうしてあれだけ通らなかつた番組企画がこの九州で通ったのか、わかったような気がしてきたわー」

実のところ、九州はなぜか他の場所より《祭主》のイメージが悪い。そんな地域であるだけに、本来ならば「祭主向上委員会」などという企画は、通りにくかつたはずなのだ。

「ああ、そうだな。この辺り、余所よりも《雑霊》の質が悪いんだ。だから、ボクらが立てた基本的に《雑霊》退治をして回る企画は渡りに船だったわけだ」

「まあ、その辺はウチらの目的と合致してるから、その辺はウィンウィンの関係ってことでいいんだけどおー……問題は《祀徒》の手配だよわねえー」

「ボクらが望む程度の《祀徒》はいないらしいから、質じゃ期待出来ないのなら、数で補うしかない」

「うーん……あ、お姉さんコーヒーおかわり」

「うむーん……他のもんも頼めよ。」

せっかく経費で落ちるんだからさあ……。

ということで、ボクは抹茶のロールケーキを」

「あ、それじゃあウチも……」

チーズハンバーグセットも一緒に注文お願いね」

「だからって、がっつり食うなよ！」

「だって、お肉とか美味しいじゃない。」

でもって、ハンバーグとかすごくくない？

チーズも食べたことなかったから、初めて食べた時なんて

もう天にも昇るような気分だったわよ」

「それ、ボくら《祭主》が口にするると微妙な表現になっちゃうから……」

「それはともかくとして……新しい《祀徒》を集めるためにオーディションとかやっちゃう？」

「ただ、《祀徒》集めは必要だけど、あまり悠長にやってる時間はないね」

「じゃあ、現地で撮りながら選考するとかは？」

「オーディションがたら《雑霊》と戦わせるって？」

悪くはないアイデアだな……もし、またしくじってもそれなりの構成にはなりそうだから」

「ひどかったもんねえ……あの、タレントさん……チョコ[-]」

ちゃんの怖がりよるときたら……」

「正直、引いた……まさか、あんなことになっちゃったなんて……」

「あれ、下手すりゃ多分一生もんよ。」

チョコちゃんタレントとしても終わりかも……」

「悪いことしちやったな……」

「本当、本当……チーズハンバーグまだかな……」

「ヨシコ……お前、あんまり反省してないだろ？」

「だって、チーズハンバーグの魅力の前では些細なことだもの……」

「やれやれ……それじゃあ、地元の猟幽会に緊急募集をかけたみるとしようか」

「——わーい、きたきたあー！

ウチのチーズハンバーグだあー！！」

■マスターより

・当シナリオは、ローカル番組『祭主向上委員会』に出演者やスタッフとして関わることになります。

・現状は、福岡市某所の廃病院に巣くっている《雑霊》を退治しつつ、番組パイロット版の撮影をするのが目的です。

・《雑霊》は主に病院中庭中央に位置する噴水から出現していますが、病棟内でも確認されています。

■シナリオの目安

危険度：★～★★★★

対応人数：制限無し

キーワード：「ローカル番組」「《雑霊》退治」「九州」「×」

■関連選択肢

A012100

「とあるローカル番組のパイロット版撮影に関わってみる」

備考：年齢、性別、組織等、参加にあたっての制限はありません。

個人としてゲームを楽しむための交流の範囲を越えない場合に限り、この「初期情報」の複製、サイトへの転載を許可します。著作権等の扱いについては、公式サイト (<http://else-mailgame.com/gddd/>) を参照ください。

copyright 2012-2013 ELSEWARE, Ltd.
